

して安心して居る事は出来ないものである。この點に於て吾
 ★は更に宮内省内匠寮の反省を冀望せざるを得ない。宮城
 の自然と歴史と藝術の美を保つ事は實に諸君の双肩にかゝ
 るものである事を銘記せられよ。そうしてもし内匠寮にし
 てもし計畫が出来得る事ならば寧ろ坂下門より近衛師團前
 に出る道路の如きを計畫して、民衆と皇室との親しみを増
 さしむる様務めらるゝ事の如何にまされるものであるかを
 述べて置かう。

宮城の外郭に就て述べた大手に更に一つ注意せらる可き
 問題に就て述べて置かう。それは復興局に依つて計畫せら
 れた東京驛前から漆を横ぎつて直通する御幸道路の漆の横
 ぎり方である。道のために石垣を取去つた残の石垣の留め
 方は、巨大な石を集めて積まれた爲め、之を馬場先の凱旋
 道路側の石垣切取の跡を小さい石を以て積んであるものに
 比して非常に安定であつて建築美の極致と云度い位簡單で
 美しいのに比して、その前の道路の兩側に設けられた欄干
 と其東京驛側の留りに設けられた小さい亭様な建物とは、
 何と云ふ不調和で、又拙劣なる意匠であらう。如斯き意匠

を以て折角よく出来た石垣の留め方の美しさを殺してしま
 つたのを見た時、物の美しさの本統に解つて居ない人達
 する仕事に對して、つくづくと歎聲を發せやには居られな
 かつた。そしてこの同じ事は竹橋の改修工事にも亦同様
 表はれて居る。某新聞紙がカフエーの様な感じのする橋だ
 と云つて彌次つて居たさうだが、其意匠の拙劣と輕薄とに
 於て、安カフエーのその如き感を抱かないものがはたし
 て幾人あるものであらう。これ位のものしか出来ないのな
 らば何も建築家が橋の意匠等に携はる必要はあるまいと思
 ふ。之等も亦百年に残る仕事に携はる重責を持つ意匠家の
 猛者をうながさざるを得ないものである。

之等の諸點を觀ても、吾々は吾々の尊き傳統を正しく保
 ち正しく發展せしむる爲めに、如何に多くの精進を要す
 かを明らかに知り得るのである。舊日本の優れたる姿を吾
 日本に委として充分に理解し尊重し得るの域に到達したけ
 れば、眞に優れたる新日本の建設は到底なし得る者でない。
 昨日はセセツション今日は表現派と流れ流れて見ても拙む
 可きものを積み得て居ない仕事は遂に徒勞に終るであらう

憶昔篇

(上)

木 島 櫻 谷

二十から三十だいの年頃は、唯眼前につきあたつて来る
 問題にのみ没頭して、過去の時代などは何一つ考へたこと
 もなかつたが、ウカ／＼して居る間に、時は容赦なく過ぎ
 去つて幾春秋も唯東の間、人並の仕事も出来ないうちに何
 時しか四十を過ぎ、五十に近づいて替邊の白髪はいよ／＼
 人目につくやうになつた。曾ては健かであつた阿母の軀も
 今は著しく衰へて目のやうに彎つた腰は折れるかと思ふば
 かり、痛々しい姿を見るにつけて今更歩んで来た人間の道
 程のあまりに長かつたことに驚くのである。

85
 假りに十年を一番と呼ぶならば、それを四度も繰り返し
 て来た遠い昔のことかと思ふと頻に童時が戀しくなつて、
 あたまの中にて居る些細なことまで再び返らぬなつ

かしい思出の種である。

時には夢のやうな過去の世界にひたつて、果てしなき追
 憶にふけることがある、それは煩しい現實の問題から離れ
 て恍惚たる夢幻境に逍遙するのである。或時は墓石冷かな
 る故人と手をとつて談笑することもあり、或時は鬢髪霜を
 帯べる老犬の身がいつしか紅顔の少年に立かへつて、毀譽
 榮辱の俗念を離れた無邪氣な童時の純情に生きることもあ
 る。眩るしい眼前の推移も浮薄な現實の生活もよそにして
 極めて平和なつかしい別天地に遊ぶ心もちになる。

未來はもとより現在の理想を實現し活動する新天地であ
 るが、過去は唯追慕の幻影、悔恨の墓石のみでない、床し
 い樂園でありなつかしい安息の世界である。新しい境地を

開拓して何ものかを實現しやうと努力もする。低級な現在の生活を多少でも向上させ意義あらしめやうと反省もするが時にはまた、なつかしい追憶にふけつて再び逢ふことの出来ない既往の人と交を訂し、再び見ることの出来ない過去の世界に思を馳せて、云ひしれぬ悦と安息を求めめるのである。

白駒の歩み如何にはやくとも、うたかたの流れ再び返へらずとも過去つた事象の儼として脳裡に存在する以上、人間の靈性がその微妙なはたらきを止めぬかぎり、一念こゝに動けば遠い昔の幼かつた時代に見たことや聞いたことが丁度繪巻を披くやうに次から次へ展開して来る。それは現實その儘の事象ではなく人間の小宇宙にやどつて幾年月を経た過去の再現である、薄絹に包まれたやうに霞のかゝつた自然の景趣は一段美しいのと同じやうに、現實から脱離して時代の霞に隔てられた過去の追憶は全然畫の世界に入る氣持であると云つてよからう。

亡父は少年の時に岸駒の子岸翁翁の塾に入つて少しばか

り畫を習つたことがあつた、岸竹堂翁はその頃からの舊知である。榊原文筆翁は私の五六歳頃に隣家に住んで居られたから父とは親交があつた、篆刻の名家で書畫に巧であつた山本竹雲翁も陶工の名人であつた、永樂和全翁も亦父が別荘の間柄であつた、夫故私も子供の時から諸翁に關したことを聞いたこともあり、また直接に見たこともあつた、それは些細なことであるがそれ／＼名匠の風格を知り得ることもあるから少し童時の印象をたどらう、且つ私が先師の門に入つてより三十餘年の間、塾の内外に於ける一般藝園の推移や變遷も随分甚しいものがあるから、多少記憶に存して居るものを回想して、しばらく懐かしい過去の世界にさまやうてみやう。

亡父の最も舊いなじみは岸竹堂翁であつた。翁が岸家の分家である連山の塾に學僕となつて勉強して居られた頃に父は本家の岸翁翁の塾で畫を學んで居つた。岸家では本家を立て、居る長子の岸翁と分家の連山とは堺町と柳馬場

分れてあつた。竹堂翁はその時代からの舊誼であるから特別に懇意な間柄で、翁にしてもまた恐らく亡父がその最も舊い友達の一人であつたらう。素樸な畫風で名利に恬淡であつた森春岳翁も、また當時連山塾に學んだ一人であつた。

父の話によると竹堂翁が連山塾に居られた時は、何分學僕のことであつたから何彼と家の雜事に服しながら、その暇に随分苦學して居られたさうだ。連山の嗣子九岳氏を背に負ふて子守りをして居られたことも珍しくなかつたさうである。

年少の頃から天稟の畫才で老成人のやうな手腕を認められて居つた。ある時三條川東の檀王法林寺で畫會が催された。翁は席上で辨慶が勸進帳を讀む圖を一氣呵成に揮毫された時などは實に非常な出来であつて、年少の人の筆とは思はれなかつたさうで來會の人々を驚かしたことも、今尙ほ眼に浮んで居ると父が生前に度々私に話したことがあつた。

元來岸家は岸駒以來有栖川宮家に仕へて越前守の格式を貰つて居つたから當時の京都畫壇では門閥家として可なり威張つて居つたものらしい。

岸翁翁は父の岸駒とは大分性格も違つて居たさうだが、矢張本家のことであり筑前介とか越前守とか肩がきがあつたから、外出などはいつも立派な長袴の裾に乗つて堂々と街中を通つて居つたさうである。

岸翁翁の畫風は父岸駒の筆つきを、その儘複製して居つたやうで分家なる連山が、當時京都の畫壇を風靡して居つた圓山四條の風をとり入れて、輕快な一格を出したのとは違つて只凝重な——わざとらしい——岸駒風の城壁に固く立籠つて居つたが、畫技以外に學問の素養もあり書も相當に上手であつて、岸駒の墓石の文字など皆岸翁の筆になつたやうに傳へて居る。亡父が少年の時翁から親しく貰つた唐紙全紙に朱練で行を分ちて朱文公の家訓を謹嚴な楷書で書いたものが今尙私の家に遺つて居る。

朱文公家訓

父之所貴者慈也子之所貴者孝也君之所貴者仁也臣之所貴者忠也兄之所貴者愛也弟之所貴者恭也夫之所貴者和也婦之所貴者柔也事師長貴乎禮也交朋友貴乎信也（以下略之）

嘉永五年歲次壬子夏四月於同功館南窓燈下走秃毫以示童蒙 虎岳 岸岱

この外にも次の詩書を見るとまた翁の風儀を稱することが出来る。

木落秋江瀾 掉舟過小橋 淺深水墨筆
向背山如掃 風冷鐘聲遠 天清雁影遙
依々詩未就 漁笛伴閑窓

併しかやうなものにも尙筑前介と書くところは岸駒の遺風が争はれぬ、ル々嫌な氣味がせぬでもないが頗る嚴格な儒先生か古武士のやうな人であつたらしいから、門人に對してもまた書技以外に品性の陶冶と人格の修養に最も留意して居られた教育法が想像される。當時畫壇の四山四條な

どの末流には書技以外に修養もない人格の低い職人風の人も少くなかつたやうだが、その中にあつて朱文公の家訓などを塾生に示して人格的薰陶をつとめたことは實に異色と見るべく、父なる岸駒と比べても畫才に於ては及ばないがその學殖と人格とは隨に優れて居つたやうである。

岸駒の尊大性は俗臭を免れないが一面に却て雅氣の愛すべきものがないでもない。衝氣滿々の中にも多少の豪快さはあつた。作品も氣品の高逸なものは無つたが——俺の腕を見よ——とばかりの豪快な味はあつた。尤も壯年時代の所謂前がきに屬するものには唐畫の影響をうけたものがあつて、晩年の岸駒風なるギョチない筆癖のものに比べると遙に優れた、さうして韻致のあるものも少くない。岸岱は親の作つた型にはまつて夫以外に出でず、窮屈な筆致で終始したから岸岱自身の特種な特殊な味はなかつた。夫だけ畫すは少かつたとも云へやう。勿論岸駒に匹敵する程の傑作は遺憾ながら無いやうだが人物は儘に一等上であつた、親程の俗氣はなかつた。恐らく岸派の前後を通じて一頭地を抜

いて居つたから畫は才筆ではなかつたが、何處かに多少の見識が見え重厚なところもあつた。凡て才あまりあるものは波瀾縱横、變化の妙はあるが動もすれば輕佻浮華の弊に陥り易い。才乏しきものは幹筋運用の術に拙であるから、變化の面白味に乏しいが夫だけ重厚な一面がある。沈着なところがある、巾分のない事は兩者を打て一九としたものか。才の最大なるものは却て才華を藏して表面に現はさないからそこに含蓄の深さがある、量られざる大さがある。巧を弄せざる所に却て巧の極致を見るのである。

運山を経て竹堂翁に到つて、いよゝ寫實的となりその慧俊敏活な才筆は巧緻洗練の極に達したが、それだけ初代の氣魄は終に見られないやうであつた。

岸駒は同功館の外に虎頭館とも號して居つた。長崎あたりで手に入れたものか虎の頭（刺製であつたか）を藏して居つたさうだ。岸岱翁もまた虎岳と號して、虎は代々岸家の表看板になつて居つたが、夫にしても虎の畫の傑作は評判程に見當らぬ。私の見た範圍では唯だ一點傑作だと思つ

た、兼仙紙半切を見たことがあつた。水滸 疎畫であつたが、矢張晩年期の所謂岸風のものでなく、いづれかと云へば前がきに屬すべきものであつた。固より寫實風のものでない構圖も新しいものでなかつたが、唯半身を描いただけで猛獸の持つ堂々たる雄偉そのものを現してあつた。殊に眼晴の鋭く人を壓するやうな威氣を覺へた。應舉や吳春などの虎は固より吾雪などの畫にも求められぬ底力の強いものがあつた。龍の畫にも四條四山など當時の畫家が描いたものに見られぬ、スツト力強い岸駒の氣魄が横逸した佳作を見ることがある。孔雀は邸内に飼つてあつたさうだからこれもまた四山四條の系統には見ない官能的な色彩と質感を突き込んだ、ある鋭さがあつた。

知人西村總左衛門氏所藏の五尺巾八尺位の大幅孔雀圖も市田理八氏舊藏の同じ位の大幅孔雀圖も、共に岸駒一代の傑作で當時の先輩である應舉吳春の二家に求め難い長所をもつて居る、市田氏の幅は約二十年前同家整理の時に三四萬圓かで誰かの右に歸したさうだ。右の二幅の外によく似

大幡の孔雀圖がまだ一幅ある筈で、岸家では岸駒の一代に三幅大作が出来たやうに傳へて居るが、あとの一幅だけは今に所在が不明であるさうな。西村氏の談話によるとこの孔雀の大幡は明治十年前後に竹家翁の紹介で、或人から購はれたもので價は僅に六拾圓であつたさうな、當時はこの價でも買手がなかつて困つて居つたが、漸く西村氏に買取られて持主も關係者も大喜びで肩の荷をおろして一杯飲んだと云ふことである。時代が違ふとは云ひながら全くウソのやうな話で驚くではないか。

西村氏は千總と稱して京都に於ける友禪染の名家であるから、この岸駒の孔雀も當時は友禪染の色ざしの参考に絶えず工場に出してあつたさうである。尊大で高く標置して居つた岸駒が自分の心血を凝らした力作が僅六十圓で漸く買手が出来て、しかもそれが友禪工場の色ざしの参考に用ひられたことを知つたならば何と云つて怒ることであらう。

亡父が岸翁翁の塾に居る時に次のやうな話がある。

岸翁翁が或骨董屋で古い木太刀を買求めて床にたてかけてあつた、武道の方にも心得があつたものか暇には毎もその木太刀を打振つて喜んで居られたさうだ。

ところが不思議なことがある。誰が云ひ出したものか、翁が愛蔵の木太刀を床に置かれてから怪しいものが現はれると云ふ噂が立つた。それは夕暮の薄暗がり時から夜にかけて此部屋に一人の老婆がボンヤリと現はれて後姿のまゝ、その木太刀の周圍を幾回となくめぐるのが幻のやうに見へるとの噂が高くなつた。それからそれへ傳へられて塾のものも召使も皆氣味悪く思つて、誰も夕暮からはその部屋に入ることを嫌がつた、夜はなるべく大勢居るところに集つて氣の弱いものは人々の間に割込んで、カタツを呑んで居る始末、その中の強がりがおれが一つ見とどけやうと云ひながらも矢張誰一人行くものがない。夜に入つてからは邸内に一種云ふことの出来ない陰惨な氣分が漂ふた。

もとより憂氣な岸翁翁は初めから笑つて金頭にかげなかつたが、あまり噂が高くなつて腫病ものは晝でもその部

刀を買求めた道具屋へ戻された。

不思議なことはいよいよ不思議で、問題の木太刀を道具屋に返されてからは例の時刻になつても、誰の眼にも絶へて今迄の怪異を見なかつたさうである。當時まだ少年であつた父も塾友と共に、豪氣な師翁の袖の下から怖わく覗いたことを話して居つた。

元治甲子の變亂は長州の福原、國司、益田などの家老が兵を率ひて三方から禁裡に迫つて來たのを會津、桑名、薩摩の三藩の兵士が京の街に火を放つて之を擊退した所謂「鑓炮燒け」の騒動である。禁裡守護にあたつて居た三藩は哈御門附近の一帶に火を放つて、市中を焼き拂つたから猛しい火勢はだん／＼南下して殆んど京都の大部分を三日の間に灰燼にしたのである。市民は皆大切な家財を負ふて左往右往に鴨川以東堀川以西の知るべを指して逃のびた。此騒動に岸翁翁もまた焼け出されて途中で亡父を訪ねられたさうだが、その時は既に三條附近も猛火に襲はれんとして頗る危険に瀕して居つたから、父も避難の準備に忙しく

屋に入るのを怖がつたから一度その噂の眞偽を見とどけて皆の迷ひをさまさうと、或時例の老婆の現はれると云ふ時刻を見はかつて、その怪しい木太刀の置いてある部屋に入られた。薄暗い廊下を通つて陰氣な部屋に入ると、髪の色がしまるやうな氣がするが、古い木太刀を買つて喜ぶやうな翁のこと故、そんなことは氣にもかけず平常のやうに部屋の中を隅から隅までジツト眺めて居られたが、翁の眼には何の怪異も見へなかつたさうで、矢張これも腫病者の云ひふらした無根のこと、唯一笑に附して居られた。

併し不思議なことにはその後も他の人々の眼には例の時刻になると、氣味悪い老婆の姿が依然として見へる、しかも小紋の着物にコゲ茶色の帯を小さく結ぶて居るとか顔は見へないが、やつれた白髪あたまの後姿で、木太刀の周圍をトボ／＼廻るとか例でも此太刀で撲殺された老婆があつて、その亡霊が迷つて居るのだとか知つたやうなことを云ひはやして怪談めいた噂が、ます／＼高くなるばかりであつたから、流石の岸翁翁もこれには困られて終にその木太

大騒ぎの最中であつた所へ岸信翁が例の書をあろじて懸々と立寄られたので——あの時はど弱つたことはなかつた——とよく話して居つた。岸信翁はこの騒動の翌年に八十一歳で世を去られた。

明治維新後は時勢の變遷によつて畫壇は全く火の消へたやうで、作家は誰も非常に苦んだのであつた。竹堂翁も此混亂時代には立派な手腕を持ちながら畫技を以て世に立つことが出来なかつた爲に御苑内に九條家の舊庭池のほとりを借りて百亭と呼ぶ料理店をはじめ當時の百文で何でも一品喰べさせた。丁度今の簡易食堂に似たものか頗る民衆的な料理店を開かれて一時は相當に賑つたが何分畫家の俄商賣であるから例によつて良い結果は見られず久しからずして廢業された。その後は友禪や刺繍の下繪などに筆をつけて生活の一助として居られた。

當時翁の手になつたもので硬い紗のやうな裂地に支那史の紗のやうな模様を連筆で一面に描いた窓かけか間じまりの

やうなものが私の家にあつた。暢達な線の語調と高麗な配色とより来る感じは非常によいものであつた。この外に盆行燈の畫をかゝれたものが百枚ほど或知人の家にとつて居る、これは私の七八歳頃のこと町内の地藏盆に掲げてあつたことを覚えて居る、その内半分は先師景年先生の筆になつて居つて、いづれも諷刺的の漫畫とも見るべく珍中の珍である、世の好事家が之を見たらば、さぞ垂涎を禁じ得ぬであらう。

此時代より十年あまりも前、明治初年頃に出来たもので近江八景の描いてある六曲の小屏風が私の家にある、布圍の筆技と手法の趣味と相まつて、風景畫としては遺作中の優なるものであらう。殊に峰情重疊の姿が巧妙を極めて居る、これだけの技量を捧つてさへ畫家として世に立つことが出来ず、友禪の下繪などで生活して居られたかと思ふとその當時の苦境が察せられるのである。

圓山に移られたのは餘程後のことで、翁の晩年時代とも云ふべく世間の風潮は大分變つて来て、藝術界も微かに曙

光を認めるやうになつたから、製作も多くは此頃に来たものであらう。やがて帝室技藝員に補せられて幾許もなく世を去られた。

此圓山時代に亡父の知人である、石州の或茶封家が翁に依頼して豊太閤が大徳寺の焼香場で柴田佐久間などの諸豪と席次を争ふて居る圖を描いて貰つたことがあつた。二尺五寸位の大幅で、十數人の人物が精細にかゝれてあつた歴史畫で、恐らく翁の一代中で最も珍らしい畫題の力作であらう。私がまだ學校に通つて居つた二三年頃であつたが今に尙眼にのこつて居る。何分翁の専門外の圖題であり別して當時は歴史畫と云つても、史的考證などはとんと考慮に入れて居らなかつたから、此畫もまた其服飾や武裝などは時代の正確さを缺いた點も少からずあつたらうが、兎も角束帯した秀吉が幼い吉法師丸を抱いて、群雄を睥睨して居る態度や、各人物の面貌などがよく出来て居つたやうに覺えて居る。固より翁の作としては他に得意の傑作も多くあらうが、かゝる珍しい畫題でしかも努力の作が石州

の邊地に秘藏せられて、あまり世人の知らないのは遺憾なことである。

それから稍後に三井家の誰かに頼まれて、虎の大幅が出来たことがあつた。依頼者の方で何か意に充たぬとかで返して来たさうで、翁は苦心の作に對して先方が禮を缺いた爲に痛く神經を勞し、病が昂じて終に永觀堂の精神病院に入院せられた。亡父も驚いて數々醫養の望を訪れた翁の夫人も宅を訪ねて何事か父と相談して居られたことを覚えて居る。幾月か醫養の後に病氣も全快して退院せられた時、翁は態々宅を訪つて亡父と閑談して居られた、その時全快の記念にとて白地の蚊阜提燈に藍で紅葉の三葉ほど散つて居るのを描き、今一つには同じ色で殘夢と篆書で書てあつた二個を携へて父に贈られた、當時私は襖ごしに窺ひて髪のモジャ／＼した眼のひかつた翁を見た——成程虎の名人だけに虎のやうな顔をした老人じや——と子供心に思つたことがある。その時翁は

私の病氣で知人に心配をかけたが都合よく全快したか

ら今後は提燈に書いた通り、號を殘夢とする積りである。

と語つて居られたさうだが、その後の作品にも殘夢の落款のものは無いらしい。唯印譜の中に小さな長方形の殘夢と刻したのを見るばかりである。この病氣は翁の一生にとつて精神的によほど強い衝動を與へたに違ひなからうから全快後は心境に著しい變化を來たして、餘生をたゞ残れる夢と觀じて、號も變へる積であつたらしいが、若し畫號と共に心境を一變して生活を更められたらば、其晩年期の作品は慥に一轉化が見られたであらうに惜しいことには矢張何かの關係から翁の心情を解せぬ周囲の人々が、とめたものか折角の決心も唯一個の印影を留めるばかりで、製作にあまり變化を見なかつたことは、翁の爲に如何にも残念なことである。翁の子女はいづれも素質がよくなかつたやうで始終心を苦しめて居られたさうだ、陽氣な氣分であつたらしいが家庭的にはあまり幸福でもなかつたやうに聞いて居つた。

入院中に亡父は數々訪問して翁を慰めたが、翁は好きな筆硯を放さずに、いつも虎の畫を描いて居られたさうである。その顔や眼つきが平日の作に比して一層嚴肅した凄味があつたから、父は入院中の餘暇になつた虎の畫を記念に翁の家に遺さんと考へたが、いつも顔だけで肢體は無茶がきに終つたさうで残念がつて居つたことがある。

或時父に次のやうな談話があつた。

畫家の一代も思ふやうにならぬものである、自分の研究がある境地まで進んで元氣もまだ衰へぬ頃何か身後に遺す大作を試みたかと思つたが、その頃は維新後の美術界不振の時代で、世間は一般に藝術を口にするものもなく、稀に骨董的に古物を鑑賞しても新しい創作を求めぬものは絶無と云つてよい位であつたから、畫家は殆ど無用視されて、己むを得ず色々應用畫に活路を求めた。二十年前後から當路の人も、大分斯道の振興に意を用ひ、幾年の後には自分の畫を求めぬものも多くなつたから、今こそ思ふ存分の製作を試みて、身後

に遺したいと思つたが、如何せん顔日の老齡で元氣も衰へ運腕も意の如くならず、日常意に満たぬまゝ人の乞ふにまかせて執筆し終に一生涯會心の作を遺すことが出来なかつた。

と残念がられたさうである。如何にも率直な心情が窺はれる、畫のみならず凡ての藝術は大抵晩年頽唐の域に入つて意氣振はず精采甚しく衰へるかさもなければ強て疎獷放縱の筆を弄して老衰の醜を粧ふに過ぎないやうである、誰でも一代の中眞に生命ある藝術精采ある作品は中年より老年にいたるまでの期間にあるやうで老て益々盛なりとか意氣壯者を凌ぐとか、世上よく聞くことであるが、不世出の大天才か又は精神修養の大なる人は別として、大抵は人間の精力に限りあり、次第に老境頽唐の域に入ることを免れぬであらうから一生研究とは云ひながら、自己の生命を身後に遺すのは轉瞬の間であると思へば恐ろしいやうである。

私の五六歳頃に隣家に柳原文筆翁が住んで居られた。

翁名は長敏文章はその號、もと幕府旗下の士で別して名門でもあり二千五百石とかの大祿を受ける家柄であつた。維新後は餘戯の丹青を専問に轉じて畫家として立たれたさうである、畫技は誰に受けられたか委しく知らないが、土佐風の畫をよくして訥言一蕙の風格をもつて居られた、紙本の草畫などは優に古土佐の域に逼るものがあつた。國學歌文を小中村清短、小林歌城などの諸家に學ばれたさうで歌詞に長じて書もまた巧で、有職故實にも精通して居られた。謡曲能樂を好みて酒量は可なり多かつたと聞いて居る。

翁の風姿がまた土佐畫そのまゝの上品さであつた。髪を細く茶釜のやうに紫の細い狼藉で結んで白衣に菊とちしたる葛の袴をつけ古風な毛皮の沓をはいて、さながら繪巻から抜けて出たやうに思はれた。

生粹の江戸つ子であつたから上品なうちに洒々落々として人に接しても城府を設けず氣味のよい性格であつた名利には頗る恬淡であつたから平生簡樸の生活に安んじて貧に處しても心を動かさず眞に超俗的の態長であつた。

夫人鎖子もまた和歌をよくして此道では翁より巧みであつたとも聞いて居つた。何年頃であつたか勅題に詠進して撰に入つた光榮を荷つて居られた。夫妻唱和して窮境に自ら楽しんで富貴榮達を浮雲の如く見て居つたことは、丁度昔の大雅王瀾の生活を見るやうであつた。厨房の空虛をつける時も衣を典して好きな酒に換える時も、皆夫人の手によつて辨ぜられた。宅などはすぐ隣家で懇意な間柄であつたから時折夫人が、

またお米屋さんにやるお金がありませんから、

と笑ひながら見へて居つたことも覺へて居る。淡泊な率直な好いおばさんだと子供心に思つて居たが、不幸にして夫人は翁に先立たれた。

ある年の十二月晦日に翁が父に寄せられた書簡にも年の暮の窮乏をつけて、その末段に鬼の糞をかき添へて、

目に見ゆる鬼もこよひはせめ來めり

かくれがさば誰にからまし

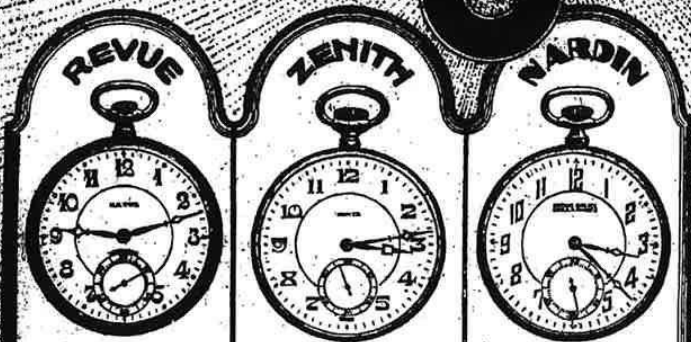
とあつた酒脱の風半眼前に見るやうである。

翁の長男が家兄と同齡で次男が私と同齡であつたから、隣家同士で日夕往來して遊んで居つた。

或年の正月元日、私の一家は團樂して雑煮餅を祝つて居つた。早朝に隣の次男が來て翁の作られた紙鶴を二つ貰つたことがあつた。一つは家兄に一つは私に、繪はもとより翁の筆になつたものである。兄の貰つた方は牛若丸が鞍馬の大僧正から兵法の秘訣を受けて居る圖で、私の方は牛若丸が辨慶と雄を争ふところであつた。紙鶴の骨から糸目までつけてあつて、専門の紙鶴つくりと少しも違はない、唯遠つて居るのは畫の立派なことであつた。太い勁い線で紙鳶風に描いて人物の眼などは蠟をつけて光らしてあつた。全く苦境時代に生活の爲に手をつけられたなごりだと思つてあつた。

私の隣家を去つて後は、或小さな眞宗寺の一室を借りて居られた。兄と共に度々此寺へ便に行つたことを覺えて居る。子供心にもあまり美しい部屋のやうに見へなかつたが手入れせぬ庭には、萩や尾花がのさきみだれたる風情は如

時計界の 3 大權威



◆ナルマン... (世界最高級時計)
ダイヤモンドといへば寶玉中の最高位であるが如くナルマンといへば時計中の最高級品であります。此時計は一個一個に携帶技術の責任ある職名所の検査表を附してあります。

○全形ニツケル紳士用... 價九拾八圓以上
○白金全形ニツケル紳士用... 價百拾五圓以上
○白金全形ニツケル紳士用... 價百拾五圓以上
○ニツケル紳士用... 價百拾五圓以上

◆ニット... (最新流行型時計)
世界最大の時計工場の一つで掛時計、其他各種時計の最新型は當社の流行の魁となつて居ります。當社は其製作にかゝる各種新時計類を毎月發表して居ります。

○十七形ニツケル紳士用... 價貳拾八圓
○十六形ニツケル紳士用... 價貳拾五圓以上
○十八形ニツケル紳士用... 價貳拾五圓以上
○ニツケル紳士用... 價五拾圓以上

◆レビユー... (最新實用的時計)
實用時計として廉價なるが其特徴であり、また左の新機軸品は一九二六年型で依然優美、機械堅牢、時鐘正確の三大要件を完全に具備して居ります。

○十六形ニツケル紳士用... 價拾八圓以上
○十八形ニツケル紳士用... 價五拾七圓以上
○十八形ニツケル紳士用... 價貳拾七圓
○十八形ニツケル紳士用... 價四拾七圓

東京市銀座 天賞堂本店 大坂支店 京都支店 西本支店

石井柏亭、西村貞著 定價三圓五十錢送料十八錢

畫の科學

種々の目に當つて技法の沿革、色彩感覺、各種の技法、繪具、畫布、漆油、グニス、畫の耐久及保價等の點に亘つて科學的に説いたものは、日本に於て之れを最初とする。科學を精究したる著作の如何に恐る可き災害を誘致するかは本書を讀んで誰しも悟る處であらう。「畫の科學」一度出て、棟梁の我が畫壇は安全なる指針を得るに至るであらう。これを廣く専門畫家、旁聽畫家、教育家、及鑑賞家の座右に題める。

黒田重太郎著 定價三圓 送料十八錢

構圖の研究

著者は此書を成すに當つて既往の理論と泰西諸先輩の教とに徴し、先づ原則としての法則を指示すると共に古今の名作に亘つて引例する事豊富である。附載せられた『近代繪畫にあらはれたる美の要素』は『構圖の研究』に於て指示された所を、近代繪畫の推移に向つて教したものである。

中村不折著 定價四圓五十錢 送料廿七錢

藝術解剖學

著者無限の蘊蓄を傾けて二ヶ年間の苦心により完成したる大著にして、無味乾燥たる従来の解剖書の類に非ず、之れに納められたる百餘の挿圖も亦其説明も、添く紙を捨て、要を取る最新的方式により、専ら素翁の良師たらん事を期す。

何にも世をわびた風流人の住まひのやうであつた、その後また轉居して一時は、美術學校に有職故實などを講じて居られた。

幕末より明治時代にかけて土佐、佳吉の二派を繼承して居つた名家も可なりあつたが、翁の如く古土佐の眞髓を得ておつた人は稀であらう、國學歌文の造詣と高雅な趣味とその超俗的な性格とが相まつて翁の筆をして一層人神の域に到らしめたのであらう、晩年にはある機會から毎朝必ず信實の像を一圓宛描かれたさうであつた、信實の靈腕に憧憬してこれを日課に思ひつかれたものか。

酒を好みて毀譽を念頭におかず世の外に超然として居られたから生存中は割合に世間に知られずして、不遇のうちにあつて唯少數の知己に満足して居られた。

97
晩年は名古屋に移住して幾年の後再び京都に歸つて東山の寓居に没せられた。男子二人は翁の畫を繼承するものなく女子はいづれにか嫁して夫人歿後の家庭は寂莫たるものであつた。京都、名古屋には随分遺品があるやうで、特に

紙本のものに他の追隨をゆるさない妙處があつた。歴史畫以外の花鳥などにも品位のある面白いものが少くない。

私の家に蔵して居る翁の短冊の中から少し遺跡をあけてみやう。

文覺上人 手弱女のその名のけさを引かけて
入そめにける法の道か左

義經朝臣 八島かたかけんといひし逆櫓をは
いひすてしのちや立しあた波

漁村夏月 かへりきてぼしたる軒の網のめに
すゝしくかゝるゆふ月のかげ

待子規 卯の花のかさねの衣にかへしより
またれそめたるぼとゝきすかな

冬 月 こからしのみかき出たる月かけに
しもさへさへて狐なくなり

歳 暮 とる筆の命毛さへにつゝかなく
こゆるうれしきとしのくれかな

亡父の追悼會に出席せられて愛題樹下泉を

しけりあふ木かけの泉わかへり

夏をよそなるかせのすゝし

當座の願蓮を

紅もしろきもなへて朝かせに

いけのはちすの花そかをれる

待子規の詠などは最も翁にふまはしいものであらう。

私は舊い記憶をたどつて考へると其學殖から趣味から性格風采からすべて支那風の富岡鐵齋翁を日本風にしたやうで近代の畫壇には求めがたい風格が認められた。最近京都で遺作集が出来たが、其撰擇の範圍が狭かつたものか眞に翁の會心の作品と見るべきものが、逸して唯まとまつた素人うけのよいものが多かつたのは遺憾なことである。

竹堂、文學二翁の外に篆刻の名家で、書畫に巧に傍ら鑑識に長じて居つた山本竹雲翁も陶土の名人永樂和全翁もまた亡父が入魂の友であつた。此二翁に關してもいろいろ逸話の傳ふべきものもあつたらうが、重時の耳にのこつて

居るものは唯畫人のことばかりで、篆刻や陶器のことはまだ子供には解らなかつた爲か、今日になつて腦裏をさぐつても記すべきものが甚だ少ない。

和全翁が亡父の没前にその病床を訪ねて携へて來た、自製の香爐に香をたいて禪の語をして居られた。父もまた老友の來訪を喜んで死期の迫つて居るに拘らず、平日の如く歡談して時には呵々大笑して居つた。死と云ふ恐ろしい運命が數日の間に襲つて來る病父が床上に談笑平日の如きを見て異様に感じたことを覚えて居る。

和全翁は父の生前共に建仁寺で、碧巖を聽く禪友であつた。

翁は陶工であつたが書畫ともに脱俗超妙であつた、私の幼少の頃は祇園下河原邊に住んで清貧に安じて居つた、了全保全より和全と續いて陶工の名人であつたが、翁の子は相當の技を有しながら放縱の質が、いつも災をなし隨分翁を苦しめて居つたことも聞ておつた、亡父在世の頃年頭には翁とこれも陶工の名手である、藏六翁と干支の香合や

茶籠を作らせて自ら勅題の和歌を題したものを懇意な友人に贈るのを例として居つた。

和全翁も藏六翁も今は其作品が非常に重んぜられるが當時は殆ど世に認められずして、落魄不遇の中にあつたことを父は非常に氣の毒がつて居つた。

山本竹雲翁は私の十歳前後に没せられたが、晩年は大抵遠方に飄遊して居られた爲に、親しくその風手に接したことは無かつた、唯翁の風格が窺はれる逸話をすこし聞いて居つた。

翁は洒脫な飄逸な一面に頗る狷介な性質で白眼世に對して居つたところは古人細川林谷を彷彿せしめるものがあつた。林谷は篆刻の名家で、書畫をよくし山陽小竹屋殿など文化文政前後の名流と交りが廣かつた、狷介傲岸で眼一世を曠ふし自分の氣に向かぬ時は王侯の需めにも應じなかつたと聞て居るが、竹雲翁も林谷によく似て居つた、専門の篆刻は近代の名手で學問が深く、餘暇の書畫もまた大趣の妙

があつた。もとく狷介の性で世に迎合しなかつたから、

生前はやはり不遇であつたらしが、翁自身は寧ろ不遇を喜んで居つたかも知れない。晩年攝津魚崎の名家山邑氏に身を寄せて優遊自ら樂で居つた。

或時急報があつて父を驚かしたことがあつた。

それは翁が何思つたか急に自殺するとかで、同家の一室に屏風を逆さに立て、蒲團の上に靜座して短刀を持つて本當に切腹しかけたからはじめは狂言のやうに思つて居た同家の人々は、驚いて之を止めやうとしたが頑固な翁は、どうしても聞入れない殆ど手のつけやうがないから、困り果てゝ急に父を呼んで、翁を説得して呉れよとのことであつた、翁の性格を知つて居る父もこれには非常に驚いて、急遽魚崎に走つて行つた、早速その部屋に入つて見ると、翁は精神に異状を呈して居つたものか、蒲團か何かで翁のからだを掩いてあつた一同は父の來るのを待つて居つたさうである、だん／＼聞いてみると何でも世間の風潮が追々輕薄になつて來るのが翁の氣に入らなかつたとかで、

俺は世間が厭やになつたから死ぬのだと頑張つてどうしても聞かなんださうだが、父は漸く却巻して居る翁を説得し、一時京都に連れ歸つたのである。その後稍常態に復したが、幾年の後に突然三條街道蹴上げ附近のある池に身を投じ、死んだのが、村人によつて發見されたのである。何か外に原因もあつたものか分らないが兎に角翁の望み通り氣に入らなかつた、現世を脱がれたのである。

墓は南禪寺天授庵にあつて、梁川屋藤翁や山中信天翁などの墓とは近いところに眠つて居る。

今一つ耳にのこつて居る面白い話がある。

翁はある時衣服を新調したが、其金の支拂に窮して居られたから、父がその金を立替へたことがあつた。半金は間もなく返されたが残金は其まゝになつて居つた。

その後翁は用事があつて宅を訪ねられた時、門前より着物を腰のあたりまで捲くりあげて異様な風姿で入つて來られた、迎へに出た私の母があまり變な風體に驚いて居つた

時翁は極めて眞面目な顔つきで、

この着物は此家へ満足につけて來ることが出來ぬのじや半分より着る資格がないから

と云ひながら裾を捲くりあげたまゝ座について平氣な顔で談話して居られたさうであつた、如何にも飄逸な翁の風格を見るやうで面白い。

没後四十年を経て近來翁の眞價がわかつたものか、世上には翁の書畫を愛好するものが多くなつたが、眞に翁の人となりを知つてゐるものは少ないであらう。特に支那のもの、古書畫古器物の鑑識に長じて翁の識語題簽によつて非常に尊重するやうになつた。殊更に翁の兼定識語を偽作して人を欺くものまで出來てきた。翁は定めて泉下から

吐、俗人輩お前達に俺の眞價がわかつてたまふものか。と罵倒して呵々大笑して居るだらう。

私は時折翁の作品や題簽の幅などを見る毎に、彌世の父執に逢つた心地がして云ふばかりない懐かしさを覺へるのである。

月 夜 中 澤 弘 光

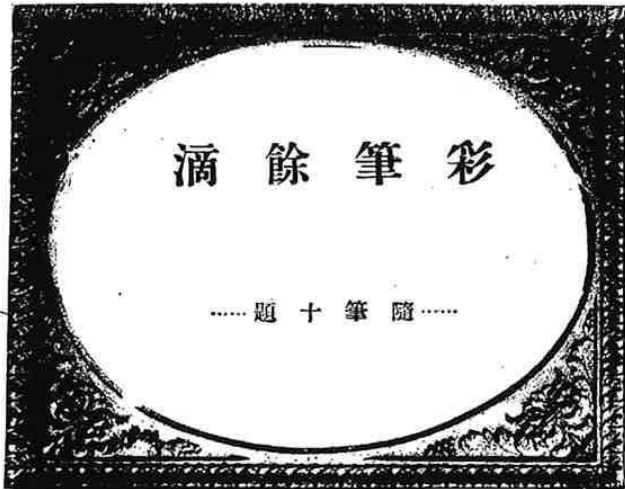
○月○夜

月はマストの上において、海上の涼氣、熱帯の夜とも思へず。露はボタボタと、デツキチエヤーに眠れる吾が面に落つ。海路一萬哩、日は既に三十餘日を過ぐ。印度洋より、紅海に入らんとする日より。

右に島を見、燈臺の灯を見る。甲板にうすべりを敷きて、仰臥せる人あり。一點の雲無き、明月の夜となれり。

様名丸無線電信にて、歸航せる船客の名を報じ來たる。而も百哩のあなたにありて、船體見えす。水の温度、攝氏三十三度三分、華氏八十六七度なり。

海上に銀波輝き、満月に近き夜なり。一等より某博士來たり、共に船尾の高きデッキに上る。星座の講釋をきいて、南極星を見、月に隣りて、色の稍赤味を帯べる火星を見る。



彩 筆 餘 滴

……題十筆隨……